論文英語あれこれ

甲 斐 敬 造*

天文学の研究成果（論文）は英語でかくのがふつうである．大学で職を得ようとするとき，あるいは昇格の審査を受けるときに提出する業績リストに，日本語でかいた論文をのせることはあまりない．それほど英語でかくことが当たり前になっている．しかし，考えてみると英語によほど堪能な人をべつにすれば，母国語でかけないというのは大変難儀なはなしである．自然科学の論文には必ずしも美文を必要とするわけではないが，自分の主張したいことが読者に正確に伝わっているか，表現が強すぎて独善的な印象を与えてはいないか，あるいは反対に表現が弱すぎて主張が曖昧になってはいないか，用語の使いかたが適切でないために違った意味にとられてはいないかなど，いつも気になってくる．ずいぶん前のことになるが，日本の学会誌に掲載されている論文の英語の質についてある日本の学者が英国人だか米国人だかにたずねたところ，understandable といわれたとかどこかで読んだことがある．欧米人の社交辞令を考慮にいれると，これは相当ひどい，なんとかわかる程度といわれていると推察できる．私も，日本天文学会の欧文誌（パブリ）に掲載された論文の英語について友人に感想をたずねたことがある．全般にはよくかけており文法のミスも少ないが，冠詞の不適切な用法や idiomatic でない表現が目につく，との講評であった．

著者のいいたいことが読者に正確にかつスムーズに伝わるのが上手な文章と定義するなら，文章の上手下手は第一には日本語でかくか英語でかくかとは無関係な問題を含んでいる．論理の組み立てや流れがぎくしゃくしていたり，ひねくれ文が多くていらいらさせられる文章は和文でも英文でもよくみかける．しかし，私がここで問題としているのは，母国語でないために私のかく英文がどのような語感で読者に伝わるか，どの程度 idiomatic な表現からはずれているか等である．たとえば，play tennis というが play skate とはいわないなどの類の慣用を無視してかくと，どのように相手に伝わるのだろうか．マーク・ピーターセン著「日本人の英語」（岩波新書）の冒頭に，日本人の友人から貰った手紙に，Last night, I ate a chicken in the backyard をみて仰天した話がユーモラスにかかれている．バーベキューでたべる鳥肉は冠詞なしの chicken であり，一方 a chicken とすると生きたにわとりをまるごとたべる場面を想像されるそうである．一字の違いでその友人が伝えようとしたのとはまったく違った状況が伝わってしまう．これに類することが私たちのかく英文におこっているのではなかろうか．

「日本人の英語」は新書として出版される前に，「科学」（岩波）に連載されており，大変面白く読んでいたが，まとめて通読するとなるほどと改めて感心させられることが多い．私たちがもっとも頭を悩ます a と the の問題が最初にとりあげられており，そこでもふつうの文法書にないユニークな説明があって楽しい．冠詞は名詞につく飾りではなく，たとえば，I ate a . . . sandwich のように，まず冠詞がきてそのあとに名詞がつくという説明はユニークである．日本の英字新聞の冒頭に，The international understanding is a commonly important problem in both the West and Japan という文をみかけたが，このセンテンスが与える印象は支離滅裂であると指摘している．前置きなしにいきなり the understanding では読者はとまどってしまう．さらに problem はここで言わんとしている課題ではなく困った問題の意味がつよく，issue とおきかえるべき．もう一つ commonly important は commonly considered to be important とすべき．上記の英文は対応する日本文を想像すれば何とか理解できるが，そうでなければ読んでいてとてもいらいらさせられると評している．一つ一つ例をあげて説明されるとなるほどとおもう．また，つまるところ「冠詞の使用不使用は文脈がすべて」とか，名詞が「可算名詞となるか不可算名詞となるかは文脈という環境による」であって，すべてのケースを文法（規則）で律することができないという主張は理解できる．しかし，冠詞の用法に関連して，電子レンジは my microwave というが，部屋に備え付けの冷凍庫を my freezer とはいわないと聞くと，やはりいぜんとして私の理解を越えたやっかいな問題であると改めて認識させられる．

この書の後半には，英語らしい英文をかくにはどうするか，いくつかの例をあげて述べられている（アダルトな表現をめざして，以降）．英語らしい表現となると文法書などにはあまり扱われていないので，日本人のかく英語のくせをよく知りかつ自然科学の論文に熟達した英米人（English speeking people）のアドバイスがもっとも有益である．「科学英語論文のすべて」（丸善）は 25 年以上前に日本物理学会誌に連載された「Journal の英語をよくするために」の流れをくみつつ新たに企画出版されたものである．このなかに Loftus, Legett, Cusach 氏らがかいた章は，日本人のかいたこの種のものにない観

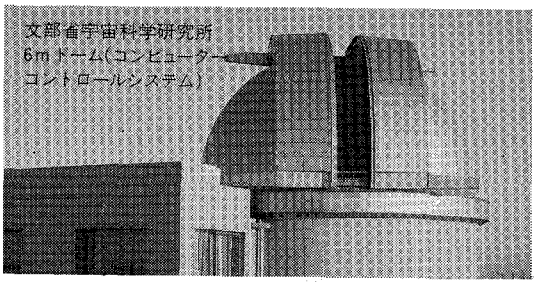
* 国立天文台 Keizo Kai

点が多く盛り込まれており大変参考になる．前述の新書とともにぜひ一読をおすすめしたい．そのほか私が読んだもののなかでは，William Strunk 著「The Elements of Style」(MACMILLAN Publ. Co.) も参考になる．米国でよく使われていると聞く．論文の英語とは直接関係はないが，アポロ月面旅行の実況で同時通訳をつとめた国弘正雄著「英語の話しかた」(サイマル出版会) の中で，「ことばに対する細心の注意とデリケートな感受性が外国語に習熟する必要条件」との指摘は，とくにつよく印象に残っている．

私が論文の英語に多少なりとも関心をもつようになったのは，オーストラリアで電波天文学の研究をしていた頃である．当時 CSIRO (オーストラリア理工学研究所) の電波物理部門で太陽電波グループのリーダーであった Dr. Wild は，簡潔にして明快な論文をかくことで定評があった．私はチャンスとばかり原稿の 'critical' reading をお願いした．ここはこの表現のほうがよい，このセンテンスは不必要だとか，ずいぶん長い時間をかけてさし向かいで教えていただいた．ときには，そんな些細なことはどちらでもよいではないかと不遜にも思うこともあったが，一つの表現もおろそかにできないことを教えられ，のちに恥ずかしい思いをした．親しい友人でもたんに英語を直して欲しいとたのむと，明らかなミスあるいは明らかに慣用に反する箇所を修正するにとどめられるのがふつうであるが，さらに踏み込んで遠慮なく直してくれとたのむと，はじめてセンテンスの書き換えを含む大幅な修正をしてもらえるようである．注意しなければならないのは適切な相手を選ぶことで，English speaking people であれば誰でもよいというわけにはいかない．やはり表現に対する繊細な気くばりをそなえた人を選ぶことが肝要である．

ASTRO Observatory Domes

天文台の建設は青少年の未来の心をはぐくみます



◆主な天体観測ドーム納入先◆

文部省宇宙科学研究所／東京大学教養学部／宮崎大学教育学部／東京学芸大学／埼玉大学／福島大学／川崎市青少年科学館／杉並区立科学教育センター／駿台学園一心荘(北軽井沢)／防衛大学校／東海大学宇宙情報センター(熊本)／栃木県こども綜合科学館／日原天文台(島根)／自然科学館星の家(新潟)等の他全国に数多くの実績があります。

アストロ光学工業株式会社

〒170 東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321

正　誤　表

天文月報 第83巻 第8号

日本人の関係した新天体のリスト

1990 Aug. 1.　香西洋樹

No.	誤	正
1)	日本人が発見した新彗星	
17	1964c=1964 IV	1964c=1964 VI
24	1968c=1968 IV	1968c=1968 VI
2)	日本人による周期彗星の検出	
019	P/Schwassmann-Whachmann 2	P/schwassmann-Wachmann 2
3)	日本人による新星（超新星）の発見	
012	SW Ser=N1987	SW Ser=N1978
012	1987 Feb. 28. 46181	1978 Feb. 28. 46181
013	V1688 Cyg=N1978 平賀三鷹 1987 Sep.	1978 Sep. 10. 50417
028	1(p)	10(p)
4)	日本人が発見した小惑星	
054	3774　Megumi=めぐみ=1987YC	Megumi=恵=1987YC
5)	日本（日本人）に関係ある小惑星名	
026	3500　Kobayashi　=小林隆夫	Kobayashi　=小林隆男